

COVID-19 Concept Papers

School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

オピニオン *Opinion*

オンライン授業で英語を教える

西村 浩子

関西学院大学人間福祉学部助教

はじめに

アクティブラーニング、インタラクション、そしてフィードバック。筆者の授業は、これらを重視しプランを立てている。また、英語を母語としない学習者たちに、彼らの将来に役立つ英語の基盤を養うためには、大量の音と文字のインプット、そして音を伴った十分な反復練習が必要である(門田, 2014)。英語を「使える」状態に導く指導方法としては、内容に中心を置き、提示 (presentation)・理解 (comprehension)・練習 (practice)・産出 (production) という PCPP の流れで指導することが効果的とされる(村野井, 2006)。しかし、COVID-19 の感染拡大に伴い、オンラインによる授業を余儀なくされた今、この PCPP の流れを汲み、授業を展開するには、工夫が必要であり、課題も多い。そして、当然ながら、学習者の興味を引き、モチベーションも維持できるようにしなければならない。試行錯誤で進めた 2020 年春学期の授業取り組み・工夫などを、受講生から寄せられたコメントも参考の上、振り返る。

1. 英語学習の目的と学習・指導方法

春学期最初にシラバスの到達内容を確認の上、受講生たちに各自「春学期の目標」を設定してもらった。一人ひとり異なる目標ではあるが、共通していることは、「使える英

語」に到達したい、ということである。そのためには、言語知識を自動化させることが必要であり、それにはシャドーイング・音読の反復練習が効果的である(門田, 2014)。さらに、実際に目標言語を使用することが非常に重要である。特に、話す・書くなどのアウトプット活動、シャドーイングやコミュニケーション・タスクなどは、言語知識の自動化を促進するとされる(村野井, 2006)。

PCPP 指導は以下の手順で行う。まず、意味中心の活動により題材内容を「提示 (presentation)」する。次に、「理解 (comprehension)」として、題材の内容理解を中心とした聴解・読解活動、理解度確認を行い、続いて、「意味あるコンテキスト」の中で、言語運用能力を高める「練習 (practice)」をする。この段階では、テキストの音読やパラレルリーディング、シャドーイングなど、様々なアウトプット活動を行う。この練習は、言語運用能力を伸ばすために不可欠とされる。最後に、題材内容を自分の英語で「産出 (production)」する。ここでは、プレゼンテーションや、コミュニケーション・タスクなどの形で、題材内容について自分の考えを述べたり、既習事項を応用して表現したりする。指導者は、知識や経験を活かし、学習者の興味を題材に引き付け、内容に重点を置いた指導をすることが求められる(村野井, 2006)。

2. 授業実施例：英語コミュニケーション I

オンデマンド型オンライン授業においても、受講生の興味を引き付け、且つ、彼らが自ら知識を求めて能動的に学習を進めるアクティブラーニングに少しでも近づくよう模索した。さらに、受講生同士、また指導者と受講生間のインタラクション、目標とする英語力育成を狙いとした課題、受講生のモチベーション維持・学習に役立つフィードバックの提供を目指した。以下、担当授業の中から「英語コミュニケーション I」について、授業実施例などを学生からの感想も含めて振り返る。

2.1 授業特性と受講生

授業目的は、「複雑でない状況において、必要に応じて学習した異文化知識を適用して、適切にやりとりができるコミュニケーションスキルを身につけること」である。主な受講生は、1回生で（1クラス約25名）、授業は、1週間に2回である。教材提示は、解説音声付き PowerPoint を OneDrive にアップする形で行い、課題提出と返却は、原則として LUNA を使用し、音声や PowerPoint の課題提出は、OneDrive を利用した。

2.2 授業内容

2.2.1 教科書を使用した授業内容とフィードバック

異文化理解を中心とした教科書を用い、原則として毎授業教科書見開き（1ユニット）を学習した。次回授業でも反復するため、実際は、1ユニットを2授業にまたがってこなす流れで行った。大まかな流れは以下の通りである。1回目授業で導入と題材提示、理解（聴解・読解・理解確認問題）活動を課題として提示し、受講生はこれらの課題と授業への「ふりかえり（学び・感想などの自由記述）」を LUNA へ提出する。その後、指導者は、2回目授業開始時までに、提出内容を確認し、個別にフィードバック返却をする。2回目授業で内容の詳細確認と解説、クラス全体へのフィードバックをした上で、音読・シャドーイングなどの課題を出し、次のユニットの導入課題を提示する。ユニットによっては、ライティングのアウトプット課題を出す場合もある。

音を伴う反復練習課題は、都度提出は求めず、春学期に3

回、指定箇所の音読音声ファイルを提出する課題を出した。提出された音声は、改善点のフィードバックを個別に返却し、クラス全体へも発音フィードバックなどを行った。1～3回目の音声を比較すると、プロソディが改善された学生が多く、フィードバックを基に継続的に取り組んだ様子が見えてきた。学生たち自身も初回と2回目の音声を聞き比べることで、自分の成長を実感し、モチベーションアップにつながったようである。

上述のように、フィードバックは、2種類行った。一つは、個別フィードバックで、指導者・学生間のインタラクションの実現を目指した。もう一方は、クラス全体へのフィードバックである。例えば、正答提示、問題の解説に加えて、練習課題の中で誤答が多かった問題など具体的な事項を取り上げて解説した。また、クラス全体の解答の傾向や良い事例や工夫された事例の共有、「ふり回り」コメントの共有も行った。

2.2.2 LUNA 掲示板や OneDrive を利用した活動

クラスメイトと交流できる活動を通算4回行った（使用言語は英語）。イベント的な活動となり、楽しい課題だったようである。前述の PCPP の中では、産出（production）に該当する。以下、特色のある3つの活動について述べる。これらの活動は、スレッド名をキーワードにすることで、全体を一目で把握できる点も大変便利であった。また、交流にあたっては、マナーの指導も事前に行った。

2.2.2.1 自己紹介

オンライン授業が本格的に始まった5月初旬に自己紹介のスレッドをアップする活動を行った。初対面であることから、クラスを5人程度のグループに分け、相互に質問し、コメントを返信する活動とした。頻繁にやり取りを行った学生も多く、他のグループのメンバーとも交流したい、という声が多く上がった。

2.2.2.2 異文化理解 project

教科書を中心とした学習が進み、受講生の中で異文化への興味が高まってきた6月初旬に行った。既習事項に関連し、自分がさらに調べた内容（国と文化）を130 words程

度でアップするというものである。この活動は、ゲーム性を持たせ、掲示板の設定を「自分のスレッドをアップ後のみ他のスレッドの閲覧可」とし、最終的に調査国がクラスで自分ひとりの場合、表彰対象とした。また、全員の調査を読んだ上で投票を行い、上位3名も表彰対象とした。アップされた調査内容が非常に興味深く充実しており、楽しみながら既習事項の理解を深め、新たな知識の獲得もできたようである。

2.2.2.3 PowerPoint presentation

春学期の最終課題として数週間掛けて取り組んだ活動である。クラスメイトに英語で今の自分について伝え、コミュニケーションを取ることを目的とした。まず、提出されたドラフトの英文を指導者が添削し、学生はそれを基に発表最終原稿と PowerPoint を作成した。完成版の音声入り PowerPoint を OneDrive にアップロードするまでは、原稿の音読の反復練習を課題とした。PowerPoint は、少なくとも最終スライドには、自分の写真を掲載する、という条件以外は、自由とした。そして、お互いの PowerPoint presentation を視聴後、掲示板を利用し、各発表内容に対するコメントをアップした。交流のみならず、今学期、音読やシャドーイングを行ってきた成果を自分自身で確認できる機会としても設定した。この活動の感想には、自分の英語で内容を伝達できた喜びや、交流の楽しさに関するものが多く寄せられた。クラスメイトの発表の技術や英語の発音などからも大いに刺激を受けた様子であった。

2.2.3 その他

反復や復習の課題スタイルも工夫した。例えば、効果を伝えた上で、既習表現をターゲットとしたワードサーチ、クロスワードを課題として出した。ゲームスタイルの課題は、大変好評であったが、クロスワードは、春学期総復習を兼ねていたためターゲットが多く、またヒント文も英文であったため、予想外に時間を要し苦勞したようであった。

3. 成果と課題

春学期に2度、受講生から要望や感想を聞く機会を設けた。不慣れなオンライン授業への不安や負担、週2回で課

題が大変だったという声も多かった一方で、教科書内容の面白さや課題の種類の豊富さなどで楽しく学習できた、という声も多かった。また、フィードバックへの感想も多かった。オンデマンド型授業ということで、クラス全体の傾向や達成度などに不安を覚える学生も少なくないので、そのような不安解消の一助となったのなら幸いである。その他、リスニング課題や授業スライドは、繰り返し視聴が出来、自分のペースで学習できる点が肯定的に捉えられていた。

今学期、英語力が付いたと実感した、という学生のコメントが比較的多かったが、実際に英語でコミュニケーションを取る環境において、どの程度通用するか、という不安が拭い去れないのが現実である。秋学期、感染への警戒や自粛への疲れが予想される中、できる限り充実した学びを提供できるよう、受講生のみならずと授業を作り上げて行けることを願う。

参考文献

門田修平 (2014) 「英語上達 12 のポイント」コスモピア。
村野井仁 (2006) 「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」大修館書店。